



## 「海洋学際教育プログラム」とは

海に関する幅広い教養を備えた人材の育成を目的に、東京大学の5研究科が参加して2009年4月に始まった文理横断型の大学院教育プログラムです。分野にとらわれない総合的な知を社会的な課題の解決に役立てる方策を探求します。東京大学の大学院生であれば誰でも履修でき、所定の単位を取得した学生には東京大学から修了証が授与されます。

このプログラムでは、海外インターンシップのほか、国内インターンシップの制度も設けています。国土交通省（気象庁、海上保安庁を含む）や国立研究開発法人水産研究・教育機構、公益財団法人環日本海環境協力センター（NPEC）を中心に、毎年15人前後の学生を派遣しています。国内インターンシップの場合も、参加後に報告書を提出することで、選択必修科目「海洋法・海洋政策インターンシップ実習」の単位として認められます。



●本資料は2023年4月現在のものです。予告なく変更する場合があります。

海洋学際教育プログラム事務局 〒277-8564 千葉県柏市柏の葉5-1-5 大気海洋研究所520号室

Tel : 04-7136-6416 E-mail : education@oa.u-tokyo.ac.jp URL : <http://www.oa.u-tokyo.ac.jp/>

本教育プログラムは、東京大学と日本財団の連携に基づき、大学院教育の一環として実施するものです。



Intermsnip  
Overseas

## 海外インターンシップ

東京大学横断型教育プログラム

海洋学際教育プログラム

2023  
University-wide Education Program  
Interdisciplinary Education Program on  
Ocean Science and Policy



# 世界の海が直面する課題に 国際的なネットワークで挑む人材を育成

## 費用負担なしの海外インターンシップ制度

この海外インターンシップは、東京大学の「海洋学際教育プログラム」（裏表紙参照）を受講している大学院生を、国連などの国際機関に3か月程度の長期にわたって、費用負担なしで派遣する制度です。世界の海が直面する課題を発見し、その解決に向けた方策を実務の現場で探求することが目的です。

現代の海洋が抱える社会問題を解決するため、東京大学は2007年、文理を横断する研究・教育のネットワーク組織「海洋アライアンス」を設立しました。この海外インターンシップ制度は日本財団の助成を得て2014年に始まり、現在は、2022年に改組した「海洋アライアンス連携研究機構」を運営母体とする海洋学際教育プログラムの一環として実施しています。

これまでに50人を超える学生を、国連食糧農業機関（ローマ）、国際原子力機関（ウィーン）など10機関に派遣しました。プログラム独自の受け入れ枠を設けており、一般公募によるインターンシップより実現しやすくなっています。

優秀なスタッフと共に働く実務の体験は、人と人のネットワークをつくり、将来に向けた自分のキャリアを見定めるよい機会になっています。その経験を生かして国連機関や外務省に就職したプログラム修了生もいます。世界の海が抱える社会課題の解決に向けて、この海外インターンシップを足がかりにさらにスキルを磨き、国際的な舞台で世界を牽引する人材に育っていくことが期待されています。



## 意思決定のプロセスに触れた

修士1年の1～3月に、オーストリア・ウィーンにある国連工業開発機関（UNIDO）でのインターンシップに参加しました。学びの日々を送るなかで得た最も大きな経験は、意思決定のプロセスに関わったことでした。

世界の国々が関わる事柄について何か一つの決定をすることは不可能に思えますが、国連は、その難問に取り組んでいかなければなりません。インターンでは、実際に動いているEUとの協働プロジェクトに参加し、国連で物事が決められていくプロセスをじかに体験することができました。

大学院修了後に新卒で入った会社では、国連やEU関連の仕事に携わることが多く、それらの機関でどのように議論が進められていくのかを知っていたことは、入社1年目から大きな助けとなりました。現職のUNFCCCで、仕事の進め方や働き方などについてインターン経験が生きていることは言うまでもありません。

このインターンでは、国連に限らず、将来グローバルに活躍するために必要なことを多く学べます。ぜひチャレンジすることをお勧めします。

国連気候変動枠組条約事務局（UNFCCC）  
東京大学大学院農学生命科学研究科生圏システム学専攻 修了

五十嵐 慶一さん（写真左）

## 国際社会のプロに出会う

国際原子力機関（IAEA）のモナコ海洋研究所にある放射生態学ラボに、2023年の2月から6月にかけて滞在しました。気候変動とリチウムが生体に及ぼす複合的な影響を、ムラサキガイを用いて調べました。日本ではあまりできない放射性物質を使った研究のスキルなどを学ぶことができました。

将来、国際機関に携わりたかったので、職務経験を積むと同時に、そこで働く人たちとコネクションを作れる可能性があると思ったことが、インターンシップに応募した動機です。世界の国々をリードし、そして協力していくプロフェッショナルの仕事とはどういうものかを体験し、自分もそのネットワークの一員になりたかったのです。実際に、研究者たちと話す機会もたくさんあり、IAEAでの実験の進め方やその目標を知ることができました。自分の成長を日々実感できる4か月間だったと思います。

東京大学大学院新領域創成科学研究科  
自然環境学専攻 修士課程1年

マーク雪さん（写真左）





# 海外インターンシップ 派遣先機関

国際連合工業開発機関 (UNIDO)、国際連合食糧農業機関 (FAO)、国際海事機関 (IMO) など 10 機関と連携しています。いずれも海洋学際教育プログラム独自の受け入れ枠を設けており、一般の公募によるインターンシップより実現しやすくなっています。

派遣の期間

3 カ月程度

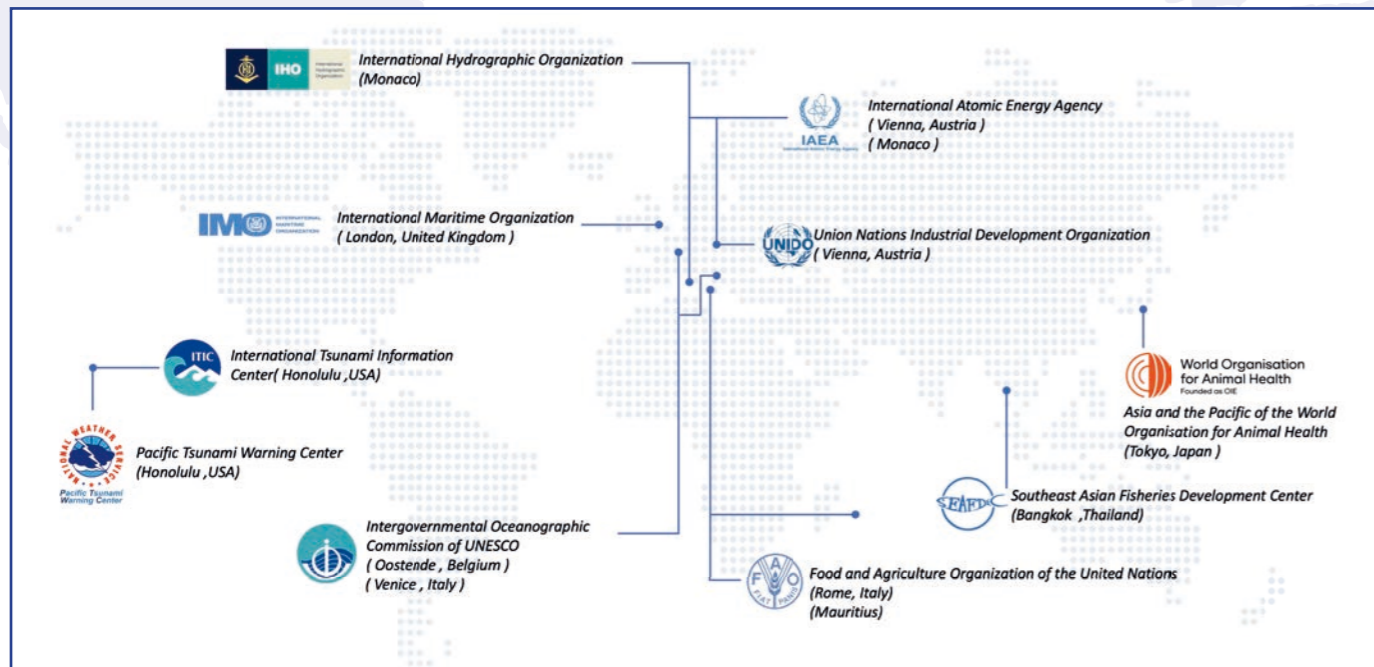
派遣国際機関

10 機関

派遣した延べ学生数

50 名

2014 ~ 2022 年度



機関名	機関名	派遣学生数 / 年度								
		2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022
国際連合食糧農業機関	FAO	2	1	1	-	2	-	1	-	-
国際水路機関事務局	IHO	1	-	-	-	-	1	-	-	2
太平洋津波警報センター	PTWC	1	-	-	-	-	1	-	-	-
国際津波情報センター	ITIC	1	1	-	1	-	-	-	-	-
国際海事機関	IMO	-	1	-	2	-	1	-	-	-
東南アジア漁業開発センター	SEAFDEC	-	2	1	2	-	-	-	-	-
国際連合工業開発機関	UNIDO	-	1	4	5	3	1	-	-	1*
国際原子力機関	IAEA	-	-	2	2	-	-	-	-	2
ユネスコ政府間海洋学委員会	UNESCO/IOC	-	-	2	-	1	-	-	-	-
国際獣疫事務局アジア太平洋地域事務所	WOAH	-	-	-	-	-	-	1*	-	-
一般枠		1	1	2	2	0	0	0	0	0
合計		6	7	12	14	6	4	2	0	5

\*ボランティア・UNIDO 東京事務所

# 帰国後の活動

帰国後は、学内の講演会や海洋学際教育プログラムが関係するシンポジウムなどで、成果を発表していただきます。

## 1 学内講演会

国際機関への就職やインターンシップに興味がある本学学生を対象にした学内講演会で、本インターンシップの経験をお話していただきます。受け入れ機関の職員も招待します。派遣学生は全員参加となっており、学生どうしの縦横のつながりを作ることができます。

## 2 対外発表

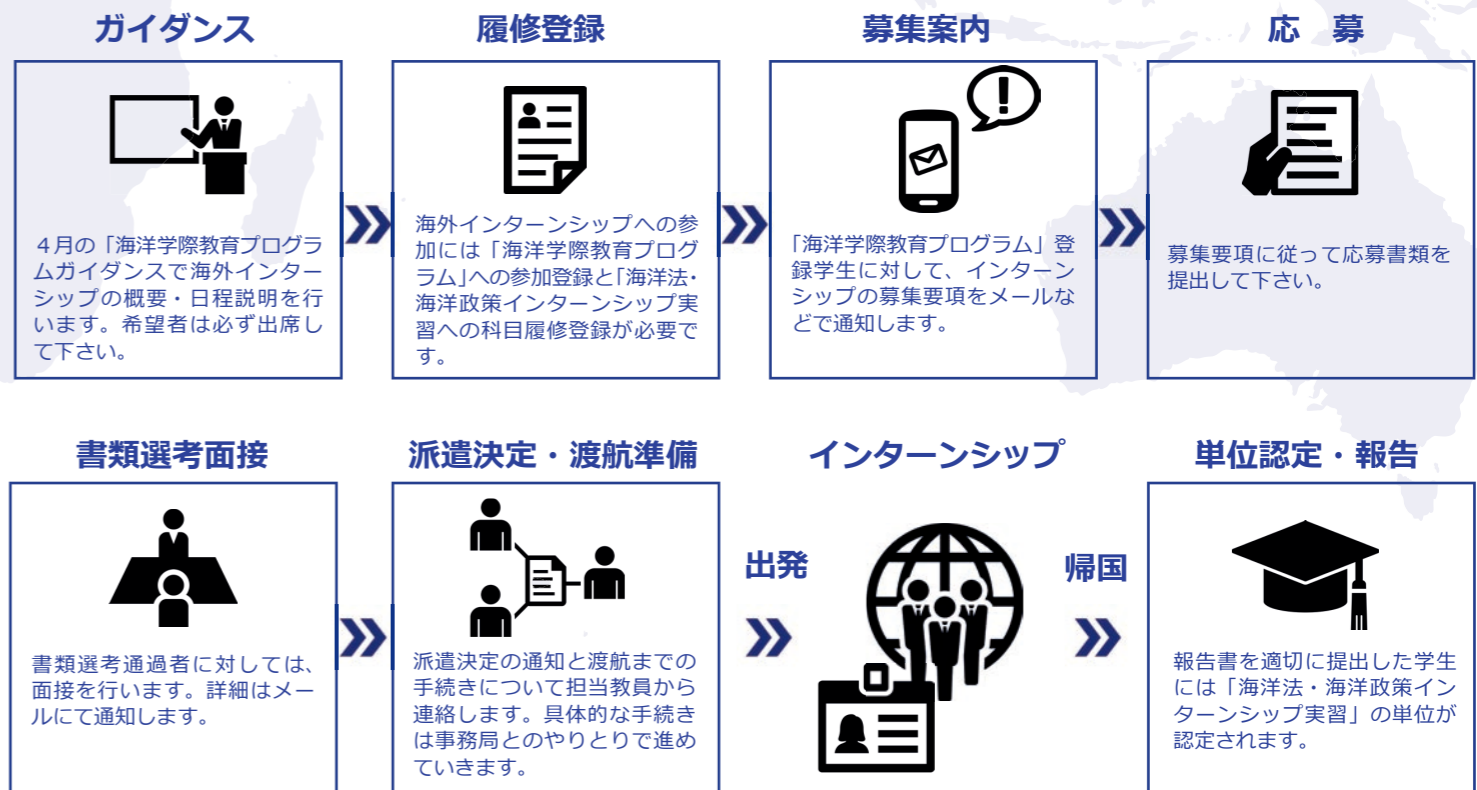
海洋学際教育プログラムが関係するシンポジウムやホームページなどで成果を報告します。学術論文としてまとめたり学会で発表したりする場合もあります。



# 海外インターンシップの流れ

※新型コロナウイルスの影響により内容が変更になる可能性があります。

参加にあたっては、受け入れ機関のスタッフと共に業務や研究に取り組むのももちろんですが、帰国後に全体報告書（日本語）、成果報告書（英語）の2種類の報告書を提出することが必須条件となります。



# 帰国後の活動



# インターンシップの教育効果



海外インターンシップに派遣された学生は、日本とはまったく違う常識や仕事の進め方、職場環境に戸惑いながら、多くの事を学んでいきます。それが自分の研究やキャリアの設計に大きな力となります。特に強調したいのは、以下の2点です

1

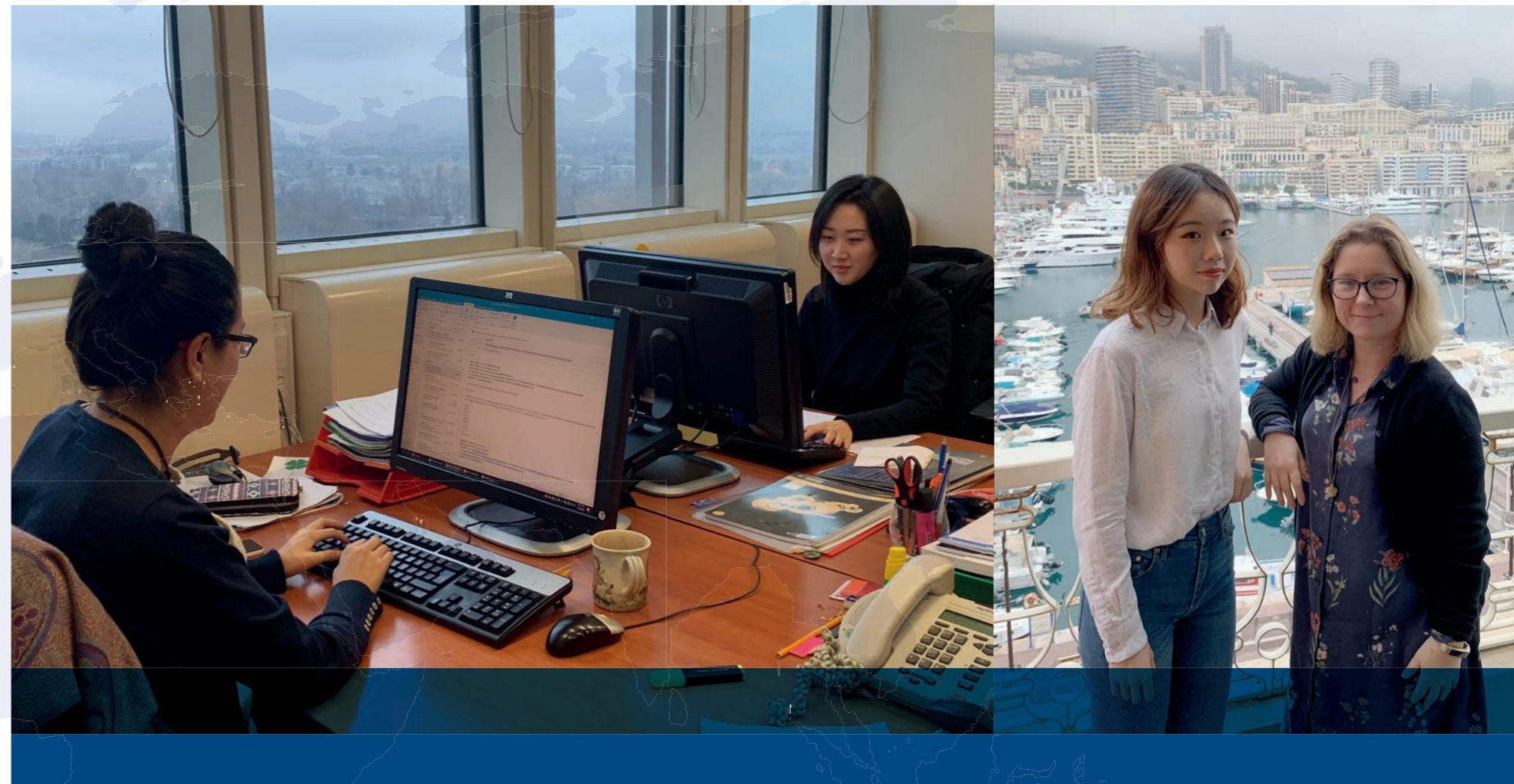
## 研究と実務の結びつきを知る

最大の特徴は、現場で働く国際的なスタッフと共に本格的な仕事ができることです。雇用形態やワークライフバランスも、日本の常識とは違ってきます。スタッフとの議論を通じて、修士課程や博士後期課程で自分の研究を世界水準の実務から見直し、新たな気持ちで修士論文、博士論文に取り組むことができます。

2

## 人と人のネットワークをつくる

実社会で仕事を進めるためには、人と人のつながりが大切です。国際的な職場では、そうしたネットワークが日本以上に必要とされています。派遣先の職場スタッフも、滞在しているインターン生も出身国はさまざまです。仕事のほか、休日を利用して家庭を訪れたり一緒に旅をしたりして、彼らと確かな絆をつくることができます。これは一生の財産になるでしょう。



## 海外インターンシップで体験した実務の例

Organization	Fiscal Year	Topics
FAO	2015	Mapping shark species distribution
FAO	2016	Rural nutrition in Antsirabe, Madagacal field word preparation
FAO	2018	Analysis of the trade in tuna distribution
UNESCO/IOC	2016	Suggested improvements in Arctic literacy frameworks and products
IAEA	2017	Development and Maintenance of Marine Information System(MARiS) and Global Marine Radioactivity Database (GLOMAR)
IHO	2014	Improving monitoring and evaluation of IHB Capacity Building Programmed
IMO	2017	Project concerning IMO's mandate on maritime security matter and training package on civil liability in IMO Conventions
ITIC	2014	ITIC Internship contributes to new proposal for enhancing tsunami education system in Japan
SEADEC	2016	Community-based resources management/co-management facilities information gathering on fisheries activities
SEADEC	2017	CBRM Project -Community- Based Resource Management
UNIDO	2016	Complying with standards and technical regulations: Critical factors in exporting fishery products to Japan
UNIDO	2016	Assessing artisanalfish processing within a sea cluster development approach to identify best management modalities
UNIDO	2017	Researched information needed for future project in Africa in collaboration with Japanese government
UNIDO	2019 2020	Study on compatibility between biodiversity conservation and Indonesia's fisheries exports (SMART-Fish Indonesia)